



## 増田渉と辛島驍 : 『中国小説史略』の翻訳をめぐって

その他のタイトル	One book, Two translators MASUDA Wataru and KARASHIMA Takeshi
著者	井上 泰山
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	45
ページ	21-46
発行年	2012-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/7265">http://hdl.handle.net/10112/7265</a>

## 増田渉と辛島驍

『中国小説史略』の翻訳をめぐる

井上泰山

### 一 はじめに

増田渉は一九三二年に上海に遊学し、内山完造の紹介により魯迅と面識を得たことが直接のきっかけとなつて、その後約九箇月間、魯迅の自宅で親しく『中国小説史略』（以下『史略』とも呼ぶ）の「講解」を受け、帰国後四年目の一九三五年にその日本語訳を上梓するに至つた。爾来、増田渉と魯迅、及び増田渉と『中国小説史略』の日本語訳とは、いわば不可分のものとして結びつけられ、その地位は翻訳刊行後七五年余りを経た現在に於いてもなお、揺らぐことはない。後から振り返つて見ると、増田渉が魯迅に師事したこと、また、『中国小説史略』の翻訳を完成してその存在を広く世に知らしめたことは、あたかも予め運命付けられたかの如くであり、そこには何の不自然さも感じられない。しかし、一冊の書物が世に出るにあたっては、いかなる時代であれ、

必ず相応の「背景」と「物語」が存在する。このことは、増田渉の『中国小説史略』の日本語訳についても例外ではなく、該書が刊行された背後には、増田渉自身の熱い思いとともに、他の様々な人々との軋轢や葛藤があつたのであり、増田渉と『中国小説史略』の翻訳は、決して最初から運命的に結びつけられた存在ではなかつたのである。

本稿は、増田渉が『中国小説史略』の翻訳を完成するに至るまでの経緯を再度振り返り、その過程で浮かび上がってくる様々な人物について、改めて増田渉との関係を捉え直す中で、特に、翻訳に関する強力なライバルであつたと思われる辛島驍との関係について、初歩的な検討を加えたものである。本稿によって、増田渉の畢生の仕事として位置づけられる『中国小説史略』の翻訳の背後に、実は、当時様々な動きがあり、増田渉以外の複数の人物が競つて該書の翻訳を企図していたこと、従つて、増田渉の翻訳

は決して平坦な道の上で成立したものでなく、複数の人物による凌ぎを削る競争の中で彼自身が勝ち取った、いわば苦闘の「戦果」とも言うべきものであったことが改めて認識されるであろう。

以下、本稿の記述は大きく五段階に分けられる。まず、「増田渉の略歴」について簡単に確認する。次に、「増田渉と魯迅との出逢い」、及び、「増田渉が『史略』の翻訳を完成させるまでの経緯」について振り返る。さらに、一九二〇年代後半における「増田渉以外の人物による『史略』翻訳への動き」についても整理する。同時に、当時の様々な状況をふまえ、結果的に増田渉が世に広まることになった背景についても考えてみる。そして、最後に、「翻訳にかけた増田渉の情熱とその意義」について、些か私見を述べたいと思う。なお、本論を補足する資料として、末尾に、増田渉と辛島驍の略年譜を付載した。

## 二 増田渉の略歴

本論を展開する前に、増田渉という人物について、その経歴と業績を確認しておくことにする。増田渉が生まれたのは、日本海に面した島根県の小さな港町であった。高等学校を卒業するまでは郷里の島根県で暮らしていたが、高等学校時代から既に相当の「文学青年」であったようで、芥川龍之介や佐藤春夫といった、当時のかなり有名な作家の作品を読みあさり、芥川龍之介に直接

手紙を書いたりして文学への関心を深め、その影響もあって、次第に中国文学への道を志すようになる。

大正の末年、一九二六年、二三歳の時に東京帝国大学の文学部に入学し、在籍中に、当時中国小説の研究者として有名であった塩谷温教授の授業を聴くうちに、魯迅の名を強く意識するようになり、『中国小説史略』という書物との出逢いも、その時に本格的に始まったとされる。大学を卒業した後、しばらくの間は就職もせず、佐藤春夫の翻訳の手伝いなどをしていたが、その頃手がけていた『平妖伝』の翻訳が一段落したことをきっかけにして、中国への遊学を思い立ち、一九三一年に上海に遊学する。その際、当時日本の書籍を中国で販売していた内山書店の店主であった内山完造の紹介によって魯迅と知り合い、以後数ヶ月にわたって魯迅から直接『史略』に関する「講解」を受け、帰国後三年間かけて翻訳に没頭し、約四年後の一九三五年七月、日本語訳をサイレン出版社から出版した。弱冠三二歳にして『中国小説史略』の日本語訳を刊行したことになる。魯迅はその時五五歳であった。魯迅との交流はその後も続き、魯迅の死の直前まで親しく手紙のやりとりが続くが、その魯迅も、一九三六年、『史略』の日本語訳が出版されたおよそ一年後に、この世を去る。一方、増田渉は、その後、島根大学や大阪市立大学などの教授を歴任したのち、一九六七年に関西大学文学部の教授となり、七年間にわたって教壇に立ったが、一九七七年三月一〇日、東京で行われた親

友・竹内好の葬儀に参列し、友人代表として弔辞を読んでいる最中、感極まって卒倒し、そのまま帰らぬ人となった。中国にも「管鮑の交わり」や「刎頸の交わり」など、親密な友情を形容する言葉があるが、増田渉と竹内好の間柄もまさしくそうした関係を思わせるもので、現在に至るまで、中国文学界では、一種の奇談・美談として語り伝えられている。

### 三 増田渉と魯迅との出逢い

次に、増田渉が魯迅と出逢った経緯、及び、『中国小説史略』について魯迅から直接「講解」を受け、帰国後日本語訳に取りかかるまでの経緯について、本人の回想や、魯迅の日記などをもとにして、そのいきさつを追ってみることにする。ただ、この点については、すでに多くの研究者が様々な資料に基づいて言及しているため、ここではその主要なものを借りて、二人の交流の軌跡を改めて確認するに止める。

増田渉の略歴を紹介した部分で少し触れたように、増田渉は東京帝国大学卒業後、佐藤春夫に師事して中国関連作品を日本語に翻訳する手伝いをしていた。その頃の様子について、増田は、次のように回想している。

私が東京へ出て、中国文学科の学生になったころは、芥川氏はまだ存命であったが、しかし病弱で、鶴沼かどこかに行

っていられる様子だったし、またこの人に会うのは、何となくこわいような気もして、とうとう面談の機を得なかった。佐藤氏の方もっと、とっつき易い人のように思えたので（実はそうでもなかったが）、一度お目にかかっているいろいろ中国の文学について教えを受けたいと手紙を出してみた。……佐藤氏からは、何曜日が訪問日にしてあるから、その日に来てくれ、というはがきをもらった。……私はやがて佐藤氏の中国小説翻訳の下訳をしたり、必要な資料をさがして提供したりするようになった。氏が、『揚州十日記』を『中央公論』に訳すときは、浅草の浅倉屋から和刻本を買ってきて提供し、『軍塵集』を出すときにも原詩の出ている本をさがし、その巻末の作者小伝の資料になった『青楼小名録』（？）というのは本郷の琳琅閣から私が見つけてきたものである。翻訳でやや大きいものは改造社『世界大衆文学全集』に入った『平妖伝』で、これは原稿紙にして千枚くらいはあったと思うが、私は毎月、百枚くらいずつ訳して佐藤氏のところに持って行った。ほかに『好速伝』を訳したが、はじめの部分だけに終わった。『苦楽』という雑誌に一、二回出たように思うが、雑誌がつぶれて、そのままになったからだ。……長かった『平妖伝』の下訳の仕事が終わったので、私は解放された気持ちになり、中国へ行ってみようと思立った。しかしまだ残っている下訳代をもらって行きたかったのだが、そのころ氏は

前夫人との間のごたごたを清算して、現未亡人の結婚される前で、関西の方へ行ってしまい、私はしばらく会うことができないうでいた。そのうち新聞で氏が新夫人を迎えて、阪急沿線岡本の谷崎氏邸に滞在していることを知ったので、私は神戸から船に乗る都合もあり、大阪へ行って岡本の谷崎氏方を訪ねたら、紀州の実家に帰られたということであった。私は紀州の方へ手紙を出して、いま中国へ行くこうとしていること、ついでには『平妖伝』の下訳代の残りをもらって行きたいと思つていふことを言つてやつた。すると返事が来て、大阪にいるならついでに紀州へ遊びに来ないか、当地には名勝地が多いし見物するのもよいだろう、ということであった。昭和五年の年末で、私はすぐ大阪の天保山棧橋から汽船で紀州の勝浦に向かい、そこから、バスで氏の故郷、下里町に行つた。尊父、鏡水先生のところに、氏は新夫人と新夫人の連れ子、鮎子さんと、いっしょに静養していた。私は佐藤家で一泊したが、氏は懸泉堂の広い庭をいろいろ説明しながら案内してくれ、また鏡水先生の依頼だからといって、私にまづい字を書かせたりした。そのとき氏は上海の内山完造氏に宛てた紹介状を書いてくれた。

「佐藤春夫と鲁迅」

（『図書』一七九、岩波書店、一九六四年七月）

ここには、当時世間を騒がせた、有名作家のある「事件」が顔を覗かせている。それは、谷崎潤一郎と佐藤春夫との間に進行しつつあった、谷崎夫人の処遇をめぐる問題である。よく知られた事実ではあるが、当時谷崎は、妻「千代」夫人との間に溝を生じ、結果として、問題の一方の当事者である佐藤春夫に夫人を与えた。しかも、佐藤春夫に自分の妻を譲る旨の宣言を公表し、いわば公然と妻を譲り渡したのである。郷里の和歌山県新宮で静養していた佐藤春夫を増田が訪ねたのは、ちょうどその頃のことであつた。増田と佐藤春夫の交流を追うことによって、当時の文壇に於ける興味深い人間模様も浮かび上がってくるように思われるが、それは本稿の本題からそれるので暫く擱くとして、ここにあるように、当時の増田は、佐藤春夫のもとで中国関連の随想や小説の「下訳」をしていた。「下訳」とはいえ、近世白話小説の原文への理解力を考えると、実質的な訳者は増田であり、佐藤春夫は単に名義を貸しただけのように思われるが、それはともかく、増田は長篇の『平妖伝』の翻訳に一応のメドがついたことを契機として、中国に遊学することを思い立つたようである。ただ、その時には特にはっきりとした目的があつたわけではなく、翻訳に一区切りついたので、自分が大学で専攻し、また翻訳を通して関わってきた中国という国を実際に自分の目で見てみようといつた、漠然とした動機から上海に渡つたことがわかる。

その頃のことを、増田は、同じく「佐藤春夫と鲁迅」の中で次

のようにも回想している。

その紹介状一本もって、私はぶらりと上海へ、中国のことをやっているのだから、一度どんなところか、自分の目でじかに見てみようという、その程度の漠然とした気持ちから上海へ向かった。中国では上海という土地が私には何だかいちばん魅力があったからである。昭和六年の春、まだ肌寒いころであった。魯迅が上海にいることなどは知らなかった。いや、そのころはまだ魯迅という名は、日本ではほとんど知られていなかった。私自身は中国文学を専攻する学生であったから、名前だけなら知っていたが、しかしそれは『中国小説史略』の著者として、学究としての魯迅であった。作家でもあることは知っていたものの、はたしてどの程度の作家か、はつきりしなかった。

これを見る限りでは、増田の上海行きは、現代の日本の若者が学生時代にぶらりと中国旅行に出かけるのと大して変わらないように思われる。言わば、物見遊山の動機から上海を訪れたことになる。しかし、あるいはそこにも何らかの必然が作用していたのであろうか、当時上海に隠れ住んでいた魯迅との運命の出逢いを果たすことになる。回想の中に「紹介状」とあるのは、佐藤春夫に書いてもらった内山書店店主、内山完造への紹介状のこと

で、増田はその紹介状を頼りに上海に渡り、内山書店を頻繁に訪れて「漫談」していた魯迅と対面する機会を得た。その意味から言えば、魯迅と増田の仲を取り結んだ最初の功績は、佐藤春夫と内山完造の二人に帰せられるべきであろう。もしもこの二人がいなければ、作家魯迅の名前も、またその著作である『中国小説史略』が増田渉の名前とともに日本語で広く日本人の目に触れるのも、かなり後のことになったものと思われる。

ともあれ、こうして増田と魯迅との歴史に残る交流が始まったのであるが、一九三一年当時の魯迅に対する印象について増田はあまり鮮明な記憶を残してはいなかったようで、むしろその後数ヶ月にわたって続いた『中国小説史略』その他の書物に対する「講解」の方が、より強く印象に残ったようである。魯迅に最初に出逢った時のことは、『魯迅の印象』（角川選書三八、一九七〇年二月、角川書店）に次のように書かれている。

一番はじめに彼とあった時に印象はどうであったか今はハッキリ覚えていない。たぶんその時、一時の旅行者で、魯迅と一回か二回しか会っていなかったとしたら、今でも鮮明に当時の模様を記憶しているかも知れないが、その後ずっと毎日、十か月にわたって彼に接触していたので、自然に第一印象も消されてしまったのであろう。私はとにかく、彼について勉強しようという気持ちから、最初は毎日内山書店へ、彼

があらわれる時間を見はからって出かけて行った。たぶん私が彼に向かって、中国の文学を勉強するにはどんな本から読んだらいいかともきいたものだろうが、彼は自分の幼少年時代の思い出を書いた『朝花夕拾』という本をくれた。私はその本を私の下宿で読んで行って、不審な字句や内容の事柄について、翌日内山書店で彼から教えてもらおう——ということとを当分づづけていた。『朝花夕拾』は彼の幼少年時代（および日本に留学していたころ）の彼とその周囲を回憶したもので、なかならず、中国の生活的風習と、その中に生長するものの幼い夢をふりかえったものである。他国から来た私に、そして中国のことを勉強しようとしている私に、まず何よりも先に中国の生活的風習とその雰囲気を知らせようとの用意からであったのだと思う。それは二百ページ足らずの本であったし、一週間たらずで読みおえてしまったが、その次にまた『野草』という彼の散文詩をくれた。散文詩といっても抒情的なものではなく、激しい怒り（政治的な意味をもつ）を託したものが多かったが、何がゆえにそういうものが書かれたか、その具体的な当時の事情についてのこまかい知識に乏しかった私には、正直のところよく呑み込めなかったが、ただ瘦せて、蒼白な顔をしている目の前の彼が、煮えたぎる強烈な憤怒の感情をもつことのできる人だということによって知った。

ここには、魯迅と最初に出逢った頃の様子や、魯迅に師事するうちに増田が次第にその強烈な個性に魅了されていく様子が詳細に描かれている。魯迅に出逢った当時、増田は弱冠二八歳、一方の魯迅は五一歳であった。

当時の状況を物語る増田の回想をもう一つ挙げておきたい。先程も引用した「佐藤春夫と魯迅」と題する文章の中にも、魯迅の人格に圧倒され、徐々に傾倒していく増田の心情が詳しく描写されている。

佐藤氏の紹介状を内山氏に渡し、内山氏は私を魯迅に引き合わせてくれたわけだが、それから十二月の末まで、上海事変直前の不穏な空気から、やむなく上海を引きあげるまで、私は魯迅の家に毎日出かけ、中国の文学について、いわば個人教授を受けることになった。魯迅が身辺を警戒して、近くの内山書店に行くほか、じつと自分の家に引きこもっている状態であったことも、私個人にとっては好都合であったというものだ。……私は毎日、魯迅に接して、彼の生きて来た異常な経験や、それとつながる苦難にみちた中国の現代史の知識を、じかに感得するとともに、いつも目を見る思いで驚きながら、魯迅とその周囲の推移を探索した。そして彼の茨を伐り開く使命感と、勇氣と敢為に感動し、これはタダモノではない、偉い人だと思うようになった。何よりも微塵のま

やかしもない、という意味での強烈な人格に打たれた。いまの中国にはこのような人のいることを、このような人の出てくる中国の現実とともに日本に報らせた、と私は思った。それで、『魯迅伝』というのを書きたした。百枚ばかり書いた原稿を佐藤氏に送って、日本の雑誌への発表を頼んだ。

魯迅の家で長期間にわたって親しく教えを受けるうちに、魯迅との距離は徐々に縮まり、増田は次第に魯迅の「人格に打たれ」、その思想に傾倒し、結果的に増田のその後の人生を大きく左右することになる。

また、ここには『魯迅伝』を書くに至るまでの心情も克明に描かれている。「日本に報らせた」との思いにかられ、増田は上海滞在中に『魯迅伝』を書き上げるが、日本での発表を依頼した相手は、かつて内山完造への紹介状を書いてくれた佐藤春夫であった。当時の日本の文壇に於いて既に一定の地位を築いていた佐藤との関係が、ここでも有効に作用し、以後、魯迅の存在は日本でも広く知られることとなるのである。

#### 四 『史略』翻訳完成までの経緯

魯迅から贈られた『朝花夕拾』や『野草』を読んだ後、いよいよ増田は『中国小説史略』についての質問を開始した。増田は『中国小説史略』の名前を日本にいる時に既に知っており、そのこと

は先に引用した回想の中でも言及されているが、実際にそれを日本語に翻訳しようと決心したのは、やはり、内山完造の勧めによるものであった。そのことは、『魯迅の印象』の中に、次のような記述があることによって確かめられる。

その次に『中国小説史略』についての質問をはじめた。それは最初から翻訳するつもりであったし（内山完造氏がそれをすすめた）、ほとんど逐字的に講解してもらった。そのころは内山書店の店頭ではなく、魯迅の宅に直接出かけるようになっていた。内山での「漫談」（当時そういつていた）をすますと、彼とともに彼の寓居へ行き（内山からその寓居までは二分か三分の距離）、それから彼のテーブルに二人並んで腰かけ、私が小説史の原文を逐字的に日本語にして読む、読みにくいところは教えてもらう、そして字句なり内容なりについて不審のところは徹底的に質問する。その答えが、字句の解釈なら簡単であるが、内容となるといろいろの説明があるので相当時間がかかる。たいてい午後二時あるいは三時ごろからはじめて夕方五時から六時ごろまでつづけた。むろんいつしか雑談にわたったり、日々生起する時事に対する意見や批評をきいたりする合の手がはいることも多かったが、およそ三か月はその本一冊の講読に費やされたと思う。当時、彼は外部とほとんど交渉をもたなかったから客はまず



なかった。広い書齋兼応接室に、夫人の広平女史が少し離れたところで彼女自身の仕事（本を読んだり、抄写をしたり、編物をしたり）をしている（息子の海嬰は子守婆さんになりたい以外へつれて出ていて部屋にはあまりいなかった）、だから、じゃまするものもなく、私は十分教えをうけることができた。許寿裳の編した魯迅年譜をみると、それは魯迅自身の日記によつたものと考えられるが、民国二十年、七月の条に、「増田渉のため『中国小説史略』を講解し全部を畢る」とあるが（追記。後に出版された『魯迅日記』を見ると、七月十七日の項に「午後増田君ノ為メニ『中国小説史略』ヲ講ジ畢ル」とある）、これが済んだときは、私もホツとしたが、彼もホツとしたであろうと思われる。

魯迅の自宅で日々『中国小説史略』について「講解」を受けた時の様子が、手に取るように克明に描かれている。ここに描かれている情況は、あたかも、のどかな休日の一コマといった感じを与える内容であるが、これはあくまでも増田の側から見た魯迅の周辺の様子であり、当時の魯迅が置かれていた政治的な立場を考えると、魯迅自身にはまたおのずから別の考えがあつたように思われる。すなわち、魯迅にとつては、当時の増田渉への直接「講解」は、あくまでも休戦日に於けるつかの間のやすらぎであり、やがて身にふりかかるであろう困難を予測しつつ、かつて自分が

心血を注いできた「中国小説史」の構想を、増田渉という異国の若い青年に伝えておこうとしたのではないか。魯迅が若い世代に将来への希望を託していたことはよく知られているが、たとえ異国から来た人物ではあつても、自分の思想を伝える有力な人物の一人として増田が選ばれたことだけは疑いのない事実である。

また、単に「小説史」に留まらず、魯迅自身は死の直前まで、「中国文学史」を書くことへの意欲を持っていた。そのことは、増田の次のような回想によつて知ることができる。

彼にも文学史を書く意志があつた。自分の生きていけるうちには、とても全部は書けないから唐代まで書くつもりだ、宋から以後になるとたくさん読まなくてはならぬ本があつて、とうていできそうもない、唐までならまだ割合に少ないからできそうだと言っていた。その文学史を書く準備にと、そのころ（昭和六年）商務印書館で予約で出していた百衲本二十四史を買っていたことを覚えている。彼の死ぬ三か月前（昭和十一年）に私は病床にあつた彼に、文学史はまだですかと聞き、その構想はどんなものかとたずね、その骨組だけは筆記して帰った。第一章、文字から文章まで。第二章、思無邪（詩経）。第三章、諸子。第四章、離騷から反離騷（漢）まで。第五章、酒、薬、女、仏（六朝）。第七章、廊廟と山林

(唐)。——あととはとても自分が生きているうちに書けそうもない、せめてこれだけ書いておきたい、とベッドの上で言った。(増田渉『魯迅の印象』角川選書三八、一九七〇年二月、角川書店)

これによって、魯迅が終生抱き続けた「中国文学史」の構想がある程度浮かび上がってくるが、残念ながら、それはあくまでも「構想」の段階に留まり、魯迅の急死によって永遠に実現されない「幻の文学史」となってしまった。

魯迅の自宅でおよそ三か月にわたって行われた『中国小説史略』の講義は、七月半ばに無事終了し、その後は『呐喊』や『彷徨』についての質問へと移っていったが、いわゆる「上海事変」など、当時の政治上の不穏な動きを警戒して、増田はその年の一二月に一旦上海を離れて帰国の途につき、翌年からは、書簡を通して魯迅との交流が始まることになる。帰国するに際して、魯迅が増田に贈った自作の詩は次のようなものであった。そこには、魯迅自身がかつて若い時に遊学していた仙台の緑豊かな風景がイメージされているように思われる。

扶桑正是秋光好、  
枫叶如丹照嫩寒、  
却折垂杨送归客、  
心随东棹忆华年。

帰国後、増田は郷里の島根県にもどり、その後一九三五年まで『中国小説史略』の日本語訳の作業に没頭することになる。ところが、いざ翻訳を開始してみると、かつて魯迅の自宅で逐字的に「講解」を受け、十分に理解していたはずの原文について、不明な部分が続出した。凡そ翻訳経験を有する者であれば誰しも感じることであるが、一読した際に原文の意味が理解できたように思っている、いざ日本語に移し替える段階になると、それまで考えてもみなかったような様々な問題が次々に出てくるのである。『史略』の翻訳作業にあたって、増田も同様の困難に遭遇したのであることは想像に難くない。まして、当時の増田渉は年齢的にも二九歳と非常に若く、また、その当時増田渉が学んだ東京大学における中国語教育の実情を考えると、いかに魯迅から個人授業を受けたからといって、格調高い文言で書かれ、しかも豊富な原文の引用を含んだ魯迅の『中国小説史略』が、右から左に、そうやすやすと日本語に移し替えられるはずはない。翻訳にあたって利用できる、いわゆる「工具書」の類も、現在と比較すれば、まさに雲泥の差があった当時の翻訳環境を考慮に入れば、相当劣悪な状態の中で作業が進められたことは疑いのないところであり、日本語に移し替える作業は相当に困難を極めたものと推察される。

こうした見解を述べると、若き日の増田渉の翻訳に対する能力に疑念を呈しているように聞こえるかもしれないが、決してそう

ではなく、むしろ、そのような必ずしも良好とはいえない環境の中で、魯迅の『中国小説史略』のもつ価値を見抜き、敢えて困難な仕事に真正面から取り組んだ増田渉という人物は、その志向の高さにおいて非凡であり、だからこそ後世に長く残るような仕事を成し遂げたのだということを、特に強調しておきたいと思うのである。

ところで、『中国小説史略』の日本語訳を刊行するという増田の願望は、魯迅との間に新たな交流を生み出すことになった。翻訳の過程で生じた疑問について、増田は帰国の翌年、すなわち一九三二年一月から毎月およそ二回のペースで魯迅に手紙を書き送り、逐一質問する。それは、一九三五年に『支那小説史』がサイレン出版社から刊行されるまで続けられ、魯迅も、その都度、丁寧な返事を書いて、増田の疑問を解消すべく懇切丁寧な指導を惜しまなかった。その間にやりとりされた書簡は、増田渉の受業生であった伊藤漱平と中島利郎の両氏によって、『魯迅 増田渉 師弟答問集』と題して一九八六年に汲古書院から刊行されている。増田の質問と魯迅の返答とがそれぞれ黒色と赤色の二色に区別されて印刷されているため、問答の様子が大変分かり易くなっている。

ここで、『魯迅 増田渉 師弟答問集』に基づいて、二人の間に交わされた問答の一例を挙げておくことにする。増田の質問に対して魯迅が懇切丁寧に答える様子が如実に伝わってくる。

第十二篇「宋の話本」の中に「梁公九諫」からの引用文がある。その中の「第六諫」の中に「局中有子、旋被打将」という言葉が出てくる。これについて増田が、「局中ニ意外ナル子ガアリ(?)」の意味かと質問したのに対して、魯迅は「no」とメモ書きした上で、「旋」の字の下に「直二」、「将」の横に「却」と書き、さらに上部の余白に「局中ニハ子ガ有ツタケレドモ直チ二人ニ取ラレテ仕舞フ」と注記している。サイレン社から刊行された初版本の『支那小説史』を見ると、この部分に、「盤上に駒があつても、直ちに取られてしまひ」という訳語があてられ、さらに、その後につけられた語釈として、「子：象棋のコマ」、「打将：打却に同じ、やつつけること、ここではコマを取ってしまふことを指す」などと書かれている。つまり、魯迅の返答内容を増田はそのまま訳文と語釈に活かしていることがわかる。

これは両者の間に交わされた問答の、ほんの一例に過ぎない。増田が投げかけた様々な疑問に対して、たとえそれが初歩的な単語の意味に関するものであつても、魯迅はあくまでも丁寧に返答し、時には詳細な図を書いたりして答えている。翻訳に対する増田の熱意を感じていたからこそ、魯迅もこのような懇切丁寧な返答を惜しまなかったものと思われる。

さて、三年余りにわたって交わされた数々の問答をふまえ、一九三五年七月二四日、増田はついに『中国小説史略』の日本語版を『支那小説史』という書名で上梓することになった。ただ、当

時の日本の情況は、こうした学術的な内容の書物を簡単に刊行してくれる出版社もなく、増田は相当苦勞したようである。そのあたりの事情を魯迅への手紙にも書き送ったものと思われ、魯迅からの返信には、『小説史略』出版に難色がありますならやめたらどうです。此の本ももう古いし日本にも今ではそんな本が不必要だろー。(一九三三年五月二〇日)といった文面が見える。しかし、奔走の甲斐あって、なんとか出版してくれる所を見つけ出した。それは東京のサイレン社・三上於菟吉の肝いりによるものであった。

ところで、出版に先立ち、増田は魯迅との共訳という形で刊行することを提案しようであるが、魯迅はその要請を断り、結果的には増田渉一人の翻訳ということに落ち着いた。考えてみれば、原著者として魯迅の名前を挙げた上に、さらに訳者の一人として同じ魯迅の名前を連ねるのは、一般的に考えれば奇妙なことだ、やや不自然な提案のように思われるが、恐らく増田としては、上海での長期間に及ぶ「講解」と、度重なる問答を通してようやく翻訳書の刊行に漕ぎ着けた以上、魯迅の功績を最大限表面に出したかったものと思われる。サイレン社版の『支那小説史』は五一〇頁にも及ぶ大冊で、値段は当時一冊五円であった。天辺に金箔を塗り、深い藍色の表紙に包まれたその重厚な翻訳書が魯迅のもとに届けられた時、魯迅は少しは、かみながらも、次のように述べてその歡びを表現している。

『支那小説史』のゼイタクな装釘は私の有生以来、著作が立派な着物を着た第一回だらう。私はゼイタク本を嗜む。到底プチ・ブルの為めか知ら。(一九三五年六月一〇日付増田宛書簡)

サイレン社版『支那小説史』は、魯迅と増田渉の二人三脚によってこの世に生み出されたわけだが、実は、当事者であるこの二人以外にも、本書の出版を背後から支援した人物がいた。それは、東京帝国大学に於ける、増田渉の二年後輩であった松枝茂夫という人物で、刊行当時、法政大学の講師であった。『支那小説史』の末尾には、わざわざ一頁を割いて、増田渉の次のような謝辞が付されている。

此の訳注書の印刷校正は甚だしく面倒なもので、余は一人これが為めに忙殺され、屢々校正のすすまざるを嘆じた。その時畏友法政大学講師松枝茂夫兄は余を鼓勵して校正のことを助けられ、その間また訳文及び注釈の修訂に關しても毎に有益な助言を与えられた。その懇ろな友情は永く余を感激せしめるところである。ここに特記して同兄の芳誼を深謝したい。 昭和十年七月十三日 校を了りて 増田 渉識

増田渉の翻訳を側面から支援した人物として、松枝茂夫という

人物の存在があったことは、増田自身が書いた他の文章からも知ることが出来る。一九六六年九月、増田は岩波書店の雑誌『図書』二〇五号に「魯迅を訳しはじめたころ」という一文を寄せ、『支那小説史』の刊行後に魯迅から届いた手紙の内容を紹介した後、松枝茂夫の協力を感謝して、次のように述べている。

この訳本『支那小説史』には原著の引用文はすべてそのまま採り入れて、その上でそれに訳文をつけたし、校正はなかなか厄介であった。すすまぬ校正を見かねて、同窓の松枝茂夫が助力を買って出て、私の下宿にきて、いっしょに手伝ってくれた。当時もう米機来襲にそなえ、燈火管制の訓練がとどきあり、真つ暗闇のおそい夜道を、西荻窪の私の下宿から、阿佐ヶ谷の自宅へ帰って行く松枝茂夫の友情に、すまない、すまないと感謝の気持ちでいっぱいであったことを、今も私はおぼえている。

一冊の書物が世に出るまでには、実に多くの縁の下の力が必要であることを教えてくれるエピソードであるが、同時に、あくまでも義理堅い増田渉の性格を非常によく伝えているようにも思われる。

ここで、以上述べたことを要約すると、増田渉という人物が文学に傾倒する過程で魯迅の名前を知り、大学在籍中に本格的にそ

の存在を意識しはじめ、上海に遊学して偶然魯迅本人と面識を得、驚咳に接するうちに『中国小説史略』の翻訳を志し、帰国後数年間かけて魯迅との問答を重ねながらついに日本語訳『支那小説史』の刊行に漕ぎ着けた、という流れになるわけだが、しかし、『史略』の刊行という点に絞って言えば、事態はそれほど単純な構造ではなく、増田が実際に翻訳を刊行するまでには、これまで紹介した以外にも、様々な紆余曲折があったようである。次章では、当時の日本の中国文学界に、増田渉以外の人物による『中国小説史略』の翻訳計画があったこと、しかも、それはかなりの程度まで進行していたことを述べることにする。

## 五 増田渉以外の人物による『史略』翻訳への動き

(一) 日本語週刊『北京週報』に連載された『中国小説史略』上册の翻訳

既述の如く、増田渉が『中国小説史略』の全訳を刊行したのは一九三五年のことであったが、実はその一〇年以上も前の一九二四年に、部分的ではあるが、『中国小説史略』の日本語訳を雑誌に連載していた人物がいた。しかもその雑誌が発行されたのは北京であった。当時北京にあった極東新信社（極東新信社は日本人である藤原鎌兄が経営）から毎週日曜日に刊行されていた『北京週報』という日本語による週刊誌に、魯迅の『中国小説史略』上册の翻訳が連載されたのである。ただし、毎週掲載されたわけで

はなく、時々休載号もあった（九六号～一〇二号、一〇四号、一  
一二号～一二九号、一三二号～一三三号、一三七号に掲載）が、  
ともかく、現在知られている限りでは、これが『中国小説史略』  
が日本語に翻訳されて活字になった最初のものだと言われている。  
では、その訳者は誰か。この問題については、以前から専門  
家の間で意見が分かれ、当時極東新信社の編集長を務めていた丸  
山昏迷という人物による翻訳であるかどうか争われてきたが、  
一九八六年に伊藤漱平が提示した見解によって、現在ではほぼ丸  
山昏迷その人が訳者である可能性が高くなっているように思われ  
る。伊藤漱平は汲古書院発行の雑誌『汲古』第一〇号において、  
次のような見方を提示している。

思うに丸山氏は、この年しばしば魯迅と接触するなかで  
（『魯迅日記』に頻出）、『史略』をもとにした日本人向けの中  
国小説史出版を企画し、魯迅の北京大学での講義を聴き、恐  
らくは彼が同大学で使用していた活版印刷の「講義」——事  
前に聴講者に配る講義案——を入手して、邦訳の準備を進め  
ていたであろう。……『魯迅日記』によれば、十二月十一  
日に新潮社出版の世話役をしていた孫伏園が二百部を届け、  
翌日魯迅が数名に対し新書を贈っているその中に丸山の名が見える。  
この新版を獲てこれを底本に丸山氏は本格的に訳業に取りかかった。  
ところがそのあとまもなく氏は急に

つたん退社して帰国することになったらしく、出版予定の邦  
文小説史の「台本」となるはずの訳文が取り敢えず陽の目を見  
る廻り合せとなったとおぼしい。翌年一月の第二週から早くも  
連載が始まっている。しかるに丸山氏はその後北京に戻った  
ものの、腎臓炎のため入院、八月に再帰国し九月四日に郷里  
信州で病没している（板倉文）。そのため、訳本は未完のま  
まに終わったのではなからうか。（今村氏の指摘された終りの部  
分に一部前後つながらないところがあるのも遺稿であったためか。）

（伊藤漱平「『魯迅・増田渉師弟答問集』跋文補記」、『汲古』  
一〇号、一九八六年二月汲古書院『伊藤漱平著作集』vに  
再録）

## （二） 橋川時雄による幻の翻訳計画

『汲古』一〇号に掲載された伊藤漱平の「『魯迅・増田渉師弟答  
問集』跋文補記」によれば、今村与志雄の岳父にあたる橋川時雄  
にも、『中国小説史略』翻訳の機会があったようである。それは  
周作人から一九二二年前後に持ち込まれた話であったらしいが、  
諸般の事情から、結局実現しないままに終わった。その間の経緯  
について、伊藤漱平の文章には次のようにある。

一九二一・一九二二（大正一〇・一一）年頃、順天時報社に

入社して一年位たつてから、周作人が『小説史略』の「謄写版原稿」を一冊だけ送ってきて、あとの原稿もできており、日本語に訳して印刷してもよいとのことであったが、先立って梁啓超の『清代學術概論』を東京の東華社名儀で発行した際、印刷費を勤務先の順天時報社へ払うのに月給から差引かれることになり、ために「魯迅の『中国小説史略』の日文訳も予告しておきながら出せなくなったのです」と述べている。

……しかし、この座談に言う謄写版原稿とは、近年発見紹介された『小説史大略』十七篇の一部分を指そう。これは北京大学や北京高等師範学校（のちの大学）での「講義」で、そのあとに出た活字本の『中国小説史大略』二十六篇や『中国小説史略』二十八篇（新潮社版）とも内容においてやや異なる。また橋川氏は座談中で『週報』に連載したとまでは述べておられぬし、もしもそういう事実があったとすれば橋川氏の女婿に当たる今村氏の耳にも多分入っていたろう。そのことがなかったとすれば、後にも述べる増田訳以外に立てられた『史略』邦訳計画の流産した一例として見るのが妥当か。

（伊藤漱平「『魯迅・増田渉師弟答問集』跋文補記」、『汲古』一〇号、一九八六年十二月 汲古書院『伊藤漱平著作集』Ⅴ、二〇一〇年一二月刊に再録）

### （三） 辛島驍による翻訳計画

先に紹介した橋川時雄の場合とは異なり、辛島驍については、実際にある程度まで『中国小説史略』の翻訳が進められていたようである意味では、増田渉の翻訳のライバルといってもよい存在であったように思われる。魯迅は一九三二年一月七日付けの増田渉宛の書簡の中で、「僕は『小説史略』もあぶないと思ふ」と述べている。ここにある「あぶない」という言葉の意味については、増田渉自身がすでに解説していて、それは、「誰かが先に訳して出版するかもしれないという意味」であるとされている。これについては少し解説が必要になるが、結論から言えば、当時の魯迅の脳裏には、かつて面識もあり、『中国小説史略』の翻訳を申し出ている辛島驍の存在が浮かんではいたのではないかと思われる。辛島驍は塩谷温の女婿にあたる人物で、増田渉とは東京帝国大学時代の同期生であり、ともに中国文学の研究を志した仲であったが、塩谷温との関係の深さからか、増田渉よりも先に、一九二六年に早くも北京で魯迅と面会し、その後、京城大学に職を得た後にも二回にわたって上海で魯迅と会い、『中国小説史略』の翻訳を申し出てその許可を得ていた。そうした経緯の後に増田渉が上海に渡って魯迅に直接『中国小説史略』の「講解」を受けたわけだが、魯迅の頭の中には、過去に交わした辛島驍との口約束が記憶として残っていたものと思われる。

そのあたりの事情について、まずは辛島驍自身の回想を検討し

てみる。一九四九（昭和二四）年六月に発行された『桃源』四巻三号誌上に、辛島驍は「魯迅追憶」と題する文章を掲載したが、その中に以下のような一節がある。

昭和四年（一九二九年）九月八日、一日と上海で魯迅と会い、いよいよ上海をたつて帰国する前に、挨拶に行った時に、私は『中国小説史略』の翻訳の許しを乞ふた。魯迅は快諾して、読了した『醒世姻縁』を土産にくれた……『小説史略』の翻訳の方は、東京や九州の同窓諸君と共訳で出す用意をすすめたが、かんじんの私が、さうした仕事よりも、眼前の朝鮮の民族問題の方により多くの関心を抱くやうになり、停滞してゐるうちに上海にいつて魯迅に親炙してゐた同窓の増田渉君から書面が届いて、自分に譲ってくれないかとの交渉があった。増田君は最も親友であり、東京の諸君との間にジレンマに陥入つたが、黙って同君の努力に委せた。東京の諸君には相すまぬことであつたが、恐らくは魯迅はあの増田君の翻訳を喜んでゐたことと思ふ（辛島驍「魯迅追憶」、『桃源』四巻三号、一九四九（昭和二四）年六月）。

これを見る限り、魯迅の『中国小説史略』の翻訳に関しては、増田渉以外にも翻訳作業を進めていた辛島驍という人物があり、増田渉自身もそのことを承知していたことがわかる。増田がわざ

わざ手紙を書いて、辛島に翻訳の仕事を「譲ってくれないか」と「交渉」したとする証言がどこまで信用に値するか、増田の手紙が公開されていない現段階では、確かなことは言えないが、しかし、このことについては別の人物による証言もあるため、少なくともそれに近いやりとりが二人の間になされたのではないかと推測される。以下に、そうした証言の一部を挙げておく。いずれも、伊藤漱平『「魯迅・増田渉師弟答問集」跋文補記』において紹介されているものである。

京城大学で父の赴任直後に業を受けられた淵上雄道氏のお話によると、当時父は、魯迅の『中国小説史略』の翻訳を進めていて完成も間近かつたとのことであるが、その仕事は同窓の増田渉氏からの要請で譲り、邦訳は昭和十年、増田氏の筆によって刊行されている。（辛島昇編『辛島驍略年譜・著作目録・写真他』巻末「十七回忌に際して」、一九八三年一〇月）

増田さんが『史略』を訳したとき、京城大学助教授辛島驍さんも『史略』の翻訳をやりかかつていた。すると増田さんは、君は国から月給もらつてるご身分だから、こんな仕事はわれわれ民間人にやらせてくれと、そんな手紙を辛島君に書く、と私に話していました。（伊藤漱平宛の松枝茂夫書簡より 一九三四年・一九三五年頃の回想）



私の父は、昭和三年に大学を出てすぐ京城へ行っておりま  
すけれども、京城の方でも着任早々のゼミで『中国小説史略』  
をとり上げて、その翻訳をすすめていたらしく、当時のお弟  
子さんから、訳はほとんど完成に近かったと聞いておりま  
す。それが出版されずに増田先生の訳が出たのは、実は増田  
先生からお手紙があつて、譲ってほしいというふうにお頼ま  
れたからだということを、母から聞かされたことがござい  
ます。（「先学を語る——塩谷温博士——」『東方学』第七二輯、  
昭和六一年七月に収載された辛島昇氏の発言）

こうした複数の人物による同類の回想が残されている以上、辛  
島驍の翻訳計画とその進行状況を知った増田が、手紙を書いて翻  
訳の権利を譲るように懇願したとされる事態も、恐らく事実で  
あつたろうと思われる。現在のように正式な出版契約を結ぶわけ  
でもなかつたと思われる当時の出版界の事情を考えると、魯迅が  
『中国小説史略』の翻訳について、二人の人物に許可を与えてい  
ることは、それほど異とするにはあたらぬのかも知れない。い  
わば、「早いもの勝ち」といった情況も存在したものとと思われる。  
そうしたいわば競争情況の中で、増田渉も出版についてはそれな  
りの焦燥と煩悶を懐いていたものと推察される。

#### （四） 塩谷温とその受講生による翻訳計画

東京帝国大学文学部支那文学科の教授であつた塩谷温は、一九  
二九（昭和四）年度に「支那文学演習」の教材として魯迅の『中  
国小説史略』を使用した。その際に使用された『中国小説史略』  
のテキスト（塩谷温書き入れ本）が、現在の天理図書館に残され  
ている。それは一九二九年一月に刊行された『中国小説史略』の  
第五版である。当時の受講生は、書き入れ本の署名によれば、七  
名であつたが、実際にはもっと多くの学生が受講していたであろ  
うと推測されている。七名の中の一人として、松枝茂夫の名前も  
見える。この演習の授業をきっかけとして、受講生の中に『中国  
小説史略』を分担して翻訳しようという計画がもちあがつたらし  
く、しかもそれは単に計画の段階に止まらず、実際にある程度原  
稿が出来上がつていたようである。先ほど紹介した七名の受講生  
の中の一人、一戸務の「魯迅随想」には、そのあたりの事情が詳  
しく述べられている。

その頃、塩谷温博士は魯迅の『中国小説史略』を講義され  
ており、私達七八人の弟子は、毎金曜日の午後、おそくまで  
帝大研究室で、先生のお世話になつた。一年かかつて読み終  
り、魯迅の小説史研究中の幾つかの誤謬なども、總べて研べ  
終つたので、私達七八人で手分けして、各時代別に、翻訳し  
てはといふ段取になり、原稿もほぼ出来上りかけ、出版書店

も定まっていたのだが、或事情でそれは完成にならなかった。然し本屋では、原稿がもらへる事だと思つて大喜びして、私達を両国の福井楼に招待して大散財であった。一昨年頃増田渉君はこれを翻訳して出版したが、あの当時にちゃんとしてゐたら、この良書も七八年はやく日本で紹介され、魯迅の偉業も充分理解する人達が多かつたらうにと残念である。増田君は後に、魯迅に直接教へを乞ひ、自己の研究も加味して、中々巧みに訳出されている。実に良心的な名翻訳である。(二戸務「魯迅随想」、『現代支那の文化と芸術』、松山房、一九三九年)(もと『早稲田文学』第四卷五号、一九三七年五月、所収)

「原稿もほぼ出来上りかけ、出版書店も定まつて」いた『中国小説史略』の翻訳が、「或事情でそれは完成にならなかった」とあるのは、先ほども述べたように、京城大学に赴任した辛島驍が既にその翻訳を進めているという情報が入り、共同で作業を進めようという話になったからである。そのあたりの事情については、目加田誠の回想が生々しく当時の状況を伝えてくれる。

塩谷先生が『小説史略』を講義しておられたので、私共(誰と誰だったか記憶しないが)が翻訳をしよう、ということになり、本郷の青木堂の二階で度々相談をしていましたら、先

生が京城の辛島がもう翻訳をはじめているそうだと聞きました。しかし、我々はそれでは納得せず、ぐずぐず言っていましたら、先生が私に、君、京城に行つて辛島と相談して来てくれ、と言われ、旅費をもらつて京城に行きました。すると辛島氏はもうだいたい仕事を進めていました。止むを得ず、それでは我々がその註釈というか資料篇というか、そういう詳しいものを作ろう、という話になりました。そして辛島氏がその出来た部分を送ってくる、というので待つていましたが、なかなか来ず、問い合せても返事がなし、とうとうそのままになつてしまい、私は東京を離れたので、あとのことは知りません。増田さんのが出来ても何にも言うことはなくなつたのです。我々が変なものを出さなくてよかつたと思つています。」(伊藤漱平宛の目加田誠書簡より)

ただし、受講生の一人であった松枝茂夫の回想は、これとはやや趣を異にしており、分担原稿がどの程度出来上がったのかについては、はっきりしない面もある。

これより先、昭和五年三月、塩谷先生の演習が終つたとき、研究室で共同で翻訳しようという話がおこつた。それは塩谷先生流に読みくだし文でやろうというのだった。ところが、訓読してみると、あれは六朝流の文章でしょう。とても

訓読文では意味がわからぬことが実験してわかったので、取り止めになりました。(伊藤漱平宛の松枝茂夫書簡より 一九三四年・一九三五年頃の回想)

以上、一九二〇年代から三〇年代にかけて、増田渉以外にも魯迅の『中国小説史略』を日本語に翻訳する計画を立てていた個人や集団があったことを確認した。結果的には増田渉の翻訳が最初に刊行され、それ以後長く中国文学界の話題を独占することになるわけだが、歴史的な経緯を振り返ると、その間には様々な競争や軋轢や煩悶があったことがわかる。なお、以上に述べたことについては、汲古書院刊行の『魯迅・増田渉師弟答問集』に付載された伊藤漱平氏の論文「『魯迅・増田渉師弟答問集』成書の縁起」『中国小説史略』をめぐって」に詳しく述べられている。

ところで、ここで気になることは、さきほど紹介したような、複数の人物によって『中国小説史略』の翻訳が企図される中で、増田渉訳が最終的に世に広まることになったのは何故か、という問題である。歴史上の出来事は起こるべくして起こる。そこには「もしも」という仮定は存在しないともいわれるが、複数の人物がほとんど同時に『中国小説史略』の翻訳刊行を目指しながら、最終的に増田がその「競争」に打ち勝ったことには、やはりそれなりの理由があるように思われる。以下、些か私見を述べて、本稿の結びとする。

## 六 増田渉の『史略』翻訳への情熱

複数の人物との競争に打ち勝って、増田渉の翻訳が何故最初に刊行されることになったか、という問題については、当時の社会的な背景や時代の様相など、様々な要素が複雑に絡み合っただけで、そのような結果に落ち着いたものと思われ、それについては、改めてじっくり当時の状況を分析して見る必要があるが、現段階で大雑把にまとめてみると、そこには二つの大きな要因が認められるように思われる。一つは、増田渉自身の人格と情熱の強さ、二つめは、ライバル的存在であった辛島驍の転向である。それぞれについて、以下簡単に触れておくことにする。

まず、増田渉の人格についてであるが、これについては、日本ではおおむね意見が一致している。それは、増田渉の人格は、「温厚篤実」であり、「仏様」のようであるということである。増田渉への追悼の意味を込めて鹿島町立歴史民俗資料館が編纂した『海を越えた友情』の中で、かつて増田渉と職場をともにしたところのある翻訳家の駒田信二や、中国文学研究会の発起人の一人でもあり、増田渉と親交のあった松枝茂夫、あるいは、関西大学で講義を受けた中島利郎氏などが、相次いで増田渉の想い出を語っているが、そこに共通して出て来る言葉は、先ほど述べた「温厚篤実」と「仏様」、あるいは人情味あるエピソードの数々である。そこには、学生とも対等につきあう型破りな増田渉の姿なども紹

介されている。

このように、増田渉という人物が、周囲からいわゆる「人格者」として認められる存在であったことは、魯迅との交流においても、事態を有利に進展させる作用を果たしたものと考えられる。と言うのは、魯迅自身が、他でもなく、まがいものを嫌う「誠実な」人柄であり、虚飾を排する性格の持ち主であった以上、増田の人柄も魯迅の目には好感をもって映り、そのことが長期間にわたる『中国小説史略』の直接「講解」の原動力になったに違いないと判断されるからである。仮に魯迅が嫌悪感を覚えるような人物であったとすれば、「講解」を受けるところか、自宅に招かれて何ヶ月も講義を受けることなど、到底考えられないことである。人物を見抜く上で人一倍厳しい眼光を具えていたと思われる魯迅にとつて、増田渉の人格への評価なしに長い間交流を継続したとは考えられない。

しかし、翻つて考えてみると、「人格」と翻訳の成就を結びつけることは、何の証拠も無いことで、一般的に考えれば奇妙な主張と思われるであろう。そうした批判を承知の上で、私としては敢えて、『中国小説史略』の翻訳にとつて増田渉の人格が果たした役割を強調しておきたいと思う。ただ、このことは、今後様々な角度からの検証を必要とする問題であり、改めて稿を起こしてみたいと考えている。

次に、辛島驍の転向についてであるが、これについては、ある

程度まで具体的な根拠を伴う形で実証することができる。辛島驍という人物は、東京帝国大学在学中に塩谷温に師事し、はじめのうちはその影響を受けて中国の古典文学、とりわけ近世の白話小説を研究の対象にしていたが、卒業後京城大学に赴任してからは次第に中国や朝鮮の時事的な問題に関心を移し、『中国現代文学の研究』という研究書を書き上げて東京大学に博士の学位を請求した。つまり、『中国小説史略』の翻訳に関して増田のライバル的存在であった辛島驍は、就職後に研究対象を変更し、古典文学から現代文学へと、重点を移していったのである。その原因はどこにあったかと言えば、奇妙な一致ではあるが、やはり魯迅との出逢いがあったようで、それについては、魯迅を追悼する辛島驍自身の文章の中で次のように回想されていることから、ある程度理解される。

私が初めて先生にお目にかかったのは一九二六年の夏であった。場所は北京の西城の先生の陋屋。当時大学の二年生であった私は『小説史略』の著者としての先生に「学者」に対する心構えでもって対していた。然しいろいろと教えて戴いていよいよ辞し帰る頃には、もう国立大学教授周樹人氏に会ったような心持ちは全く無くして了っていた。先生は小さな殻を背負っていられるような人ではなかった。半分は若い者をいたわる慈父のような、そうしてあとの半分は、あの細い

肩に中国の苦悩をたった一人で背負っておられるような思いのする人であった。……東京に還った私は、それ以来「過去の支那」について考えるよりも強く「現代と将来の中国」について想うことが多くなった。そしてその度に先生のあの「北京脱走」前夜の面貌が目の前を往来して消えなかった。「魯迅先生」、昭和十一年一月一〇日号『京城帝国大学学友会報』

北京で魯迅に直接面会し、強烈な印象を受けたことにより、辛島驍にとつて、中国古典小説は次第に「過去の支那」の遺産として映ったであろうこと、そしてその後徐々に研究の対象を現代文学へと移していくきっかけとなったことが、はっきりと見てとれる。塩谷温との関係もあつて、東京にもどつた後もしばらくは古典小説の研究も継続していたようであるが、京城大学に赴任して以降の辛島は、果たして、小説研究からはむしろ距離を置き、時事問題へと研究の軸足を移していくことになる。上海からの帰国後、『中国小説史略』の翻訳に本格的に取り組んだ増田渉とは対照的な姿がそこにある。既に述べたように、辛島驍に対して翻訳する権利を譲ってくれるように頼んだ時点で、すでにかなりの程度まで翻訳を進めていたとされる辛島が素直に増田の要求に応じたのは、一つには勿論増田に対する辛島の篤い「友情」のためとも考えられるが、決してそれだけではなく、当時すでに辛島自身

が「過去の支那」に対する情熱を減退させていたことも大いに関係があるように思われる。ただ、この点についても、当時の辛島と増田の関係や、二人が置かれていた環境を詳細に調査した上でなければ、確かなことは言えない。従つて、現時点では、これも、あくまでも個人の憶測の段階に止め、今後の更なる調査に委ねたいと考える。また、二人の間に存在していたはずの、恩師塩谷温に対する微妙な感情なども、詳細に探ってみる必要があるように思われるが、遺憾ながら、現時点ではこれ以上述べる用意がない。

今年魯迅没後七五周年にあたる節目の年である。また、増田渉が他界してから、ほぼ三五年、やはり一つの節目の年にあたる。このあたりで、増田渉と魯迅との交流の経緯をいま一度振り返り、彼が生涯にわたつて情熱を傾け続けた『中国小説史略』の翻訳という仕事のもつ意味を考えることも、また有意義なことではないかと考え、本稿を草するに至つた。既述の如く、『中国小説史略』の翻訳に関しては、辛島驍という人物が増田の強力なライバルとして存在していた事実があり、翻訳をめぐる増田渉とのやりとりの実態や、辛島自身の白話文学その他に対する意識のあり方とその変遷の経緯など、検討すべき課題は多い。不足の点については、今後調査を継続し、稿を改めて明らかにしたいと考えている。

【増田 涉 略年譜】(冒頭の数字は年齢を示す)

- 一九〇三(M三六)年一月一日生  
\*島根県八束郡惠曇村(現鹿島町)片句
- 一九一八(T七)年四月  
中学校入学 \*旧制松江中学校
- 一九二二(T一一)年三月  
中学校退学
- 一九二三(T一二)年四月  
高等学校入学 \*旧制松江高等学校文科乙類
- 一九二六(T一五)年三月  
高等学校卒業
- 一九二六(T一五)年四月  
大学入学 \*東京帝国大学文学部支那文学科
- 一九二九(S四)年三月  
大学卒業
- 結婚
- 上海遊学 \*魯迅に師事し『史略』の講解を受ける  
帰国
- 魯迅との書簡の往復始まる
- 一九三二(S七)年  
『中国文学研究会』結成 \*竹内好、武田泰淳、松枝茂夫  
長男誕生
- 一九三三(S八)年  
『魯迅選集』(岩波文庫)出版
- 一九三四(S九)年  
『支那小説史』(サイレン社)出版
- 一九三五(S一〇)年六月  
上海再訪、魯迅を見舞う
- 一九三五(S一〇)年七月  
魯迅逝去
- 一九三六(S一一)年一月一日  
↓一九三六(S一一)年一月一日
- 一九三九(S一四)年五月  
興亜院(内閣直属機関)入院
- 一九四七(S二二)年  
再婚
- 一九四八(S二三)年四月  
外務省退職
- \*S一五〃二四年の間、法政大学、東京帝国大学、慶応義塾大学、非常勤講師
- 一九四九(S二四)年七月  
島根大学文学部教授 就任
- 一九五三(S八)年二月  
島根大学 退職

- 一九五三（S二八）年三月 大阪市立大学文学部教授 就任  
 六四 一九六七（S四二）年三月 大阪市立大学定年退職  
 \* 大阪市立大学在職中、島根大学、関西学院大学、京都大学、神戸大学、岡山大学、和歌山大学 非常勤講師  
 一九六七（S四二）年四月 関西大学文学部教授 就任  
 七一 一九七四（S四九）年三月 関西大学定年退職 \* 非常勤講師として出講（一九七七）  
 七四 一九七七（S五二）年三月一〇日 死去  
 \* 竹内好の葬儀で弔辞朗読中に心臓発作を起こし死去  
 ↓一九七八（S五三）年 関西大学図書館に「増田文庫」新設

## 【依拠資料】

『海を越えた友情——増田渉と鲁迅——』（鹿島町立歴史民俗資料館、一九九〇）

## 【辛島 驍 略年譜】

- 一九〇三（M三六）九・一六 博多生まれ  
 修猷館中学 卒業  
 山口高等学校 卒業  
 二二 一九二五（T一四） 東京帝国大学文学部支那文学科入学。増田渉と同級。  
 明清小説の研究に取り組む。  
 一九二五（T一四）一二・四 研究発表「青心」（座談会）  
 \* 陳源「閑話」（『現代評論』所収）が鲁迅を攻撃。↓『史略』は塩谷温の『支那文学概論講話』の「小説」部分を「剽窃」したものである。  
 二三 一九二六夏 塩谷温の紹介で鲁迅に面会（北京西城周作人の自宅か）。『内閣文庫書目』、『舶載書目』、『斯文』（三冊）を鲁迅に送る。当時の鲁迅は北京大学教授。辛島に馬廉（隅卿）を紹介。  
 \* 『鲁迅日記』（一九二六・八・一七）「辛島驍君来并送盐谷节山所赠《全相平话三国志》一部、冈野同来。」

\*『魯迅日記』(一九二六・八・一九)「上午辛島驍君来、留其午餐、贈以排印本《西洋記》、《醒世姻縁》各一部。」

\*東京に還った私は、それ以来「過去の支那」について考えるよりも強く「現代と将来の中国」について想うことが多くなった。そしてその度に先生のあの「北京脱走」前夜の面貌が目の前を往来して消えなかった。(一九三六年「魯迅先生」)

一九二六(S一) 一二・二二

一九二七〜一九二九 魯迅が辛島に書翰を送る(発信地は廈門)

二四 一九二七(S二) 一〇・一 魯迅との間に書翰の往復(五通)。

二五 一九二八(S三) 東京大学で講演。演題:「金聖嘆の生卒年代とその事跡」。

\*塩谷温が上海で魯迅と面会。

二六 一九二九(S四) 東京帝国大学文学部支那文学科卒業。卒論題目:「金聖嘆の生涯とその文芸批評」。

一九二九(S四) 九・八/一 上海で魯迅に面会(二度目)。夫人の許広平にも会う。「中国小説史略」の日本語訳についての許可を得る。

\*辛島驍「魯迅追憶」:「いよいよ上海をたつて帰国する前に、挨拶に行つた時に、私は『中国小説史略』の翻訳の許しを乞ふた。魯迅は快諾して、読了した『醒世姻縁』を土産にくれた」

二九 一九三二(S七) 「日本文学より支那文学へ」(『朝鮮及満州』)発表

一九三二 學術研究補助金獲得。テーマ:「中国小説の整理と解説」

三〇 一九三三(S八) 一・三三/二四 上海で魯迅に面会(三度目)。魯迅は辛島に写真二枚を贈る。

三一 一九三四(S九) 一〇・二七 東京大学漢学大会で講演。演題:「公案文学論」

三三 一九三六(S一一) 「日本文学関係著作支那翻訳目録」(『京城帝大創立十周年記念論文集』)発表

一九三六(S一一) 「魯迅先生」(『京城帝国大学学友会報』)一月一〇日号所収)発表

\*汲古書院刊『中国現代文学の研究——国共分裂から上海事変まで——』に全文を再録

三五 一九三八(S一三) 一〇・一九 論文「中国現代文学の研究——国共分裂から上海事変まで——」脱稿

(「歴史篇」)四〇〇字×八六二枚 「輯録篇」四〇〇字×六二九枚)

三六 一九三九(S一四) 一 上記論文を東京帝国大学に学位論文として提出

四三 一九四六(S二一) 春 上記論文により学位授与(東京帝国大学)

四五 一九四八(S二二) 春 「中国の新劇」(昌平堂)刊行

五五 一九五八〜五九(S三三〜三四) 『全訳中国文学大系』(東洋文化協会)二〇巻中一一巻完成



- 六一 一九六四 (S三九) 『醒世恒言』『十二楼』『無声戲』『拍案驚奇』『警世通言』
- 六三 一九六六 (S四一) 『魚玄機・薛濤』(『漢詩大系』第一五卷、集英社) 刊行
- 六四 一九六七 (S四二) 四・二七 『宋詩選』(『漢詩大系』第一六卷、集英社) 刊行
- 一九八三 (S五八) 一〇・一 死去
- 『中国現代文学の研究——国共分裂から上海事変まで——』(汲古書院) 刊行(『歴史篇』のみ収録)

〔著者自身による同書の解説文〕

本来著者は、大学における中国文学の研究が、古代に偏向していて、近くも清朝末をもって打切られていることと、ややもすれば所謂漢学の臭気を多分に漂わせていて、現代に疎く、動きつつある友邦の動向に対して相変らず旧尺度をもって測らんとしつづつあることに不満をもち、清朝末期、欧米文化の流入以後の中国の真実を探らんとして、現代文学の研究に志した者であるが、清末に遡っての報告は余りにも龐大となるので、最も切実にして眼前の動向を本著に収めた次第である。(文学・哲学・史学会連合編「研究論文集」「研究論文抄録誌」第一卷、一九五〇年刊所収)

【依拠資料】

- 一 一九四九 (S二四) 『桃源』第四卷三号所収「鲁迅回想」(任鈞訳「回憶鲁迅」、『鲁迅研究資料』一三、天津人民出版社、一九八四年)
- 二 一九七八 (S五三) 熊融「鲁迅と辛島驍——鲁迅の『辛島驍への手紙』をよんで——」(『吉林大学哲学社会科学報』、一九七八年三期)
- 三 一九八三 (S五八) 『中国現代文学の研究——国共分裂から上海事変まで——』(汲古書院) 所収、辛島昇「解説」
- 四 一九八四 (S五九) 熊融「鲁迅与日本汉学家辛岛驍」(『鲁迅研究資料』一三、天津人民出版社、一九八四年)
- 五 一九八七 (S六二) 伊藤漱平「塩谷温博士の書き入れ本『中国小説史略』をめぐる」(『啞啞特刊』、『伊藤漱平著作集』v、汲古書院、二〇一〇再録)

(附記) 本稿を草するにあたって、『伊藤漱平著作集 第五卷』

(汲古書院、平成二二年) 所収の三篇の論文、「『魯迅・

増田渉師弟答問集』成書の縁起」『中国小説史略』をめぐって」、『魯迅・増田渉師弟答問集』跋文補記、「塩

谷温博士の書き入れ本『中国小説史略』をめぐって」『中

国小説史略』邦訳史話断章」から多くの示唆を得た。

特に、第五章「増田渉以外の人物による『史略』翻訳への動き」の執筆にあたっては、当該論文中に引用されている書簡をそのまま本論文にも借用させていただいた。

記して感謝の意を表したい。

(二〇一一・一〇・一〇 脱稿)

# One book, Two translators

## MASUDA Wataru and KARASHIMA Takeshi

INOUE Taizan

MASUDA Wataru and KARASHIMA Takeshi entered the University of Tokyo in 1925 and enrolled in the Faculty of Literature to study Chinese literature under Professor SHIONOYA On who was a famous scholar and authority of the Chinese classics. After MASUDA and KARASHIMA graduated from the university, their careers contrasted as if to reflect light and shadow. MASUDA had been engaged in translation of a variety of Chinese books, working with SATO Haruo who was a famous writer and known as one of the leading figures in Japan's literary world at that time. This translation experience and association with SATO was the start of MASUDA's career in business. MASUDA went to Shanghai for study, where he met ROJIN, a Chinese writer with exceptional talent, and they became good friends for the rest of their lives. In addition, MASUDA left a name for himself as a successful translator of 中国小説史略 (A Brief History of Chinese Fiction) written by ROJIN. On the other hand, KARASHIMA went to Korea to become a university professor at Keijou Imperial University as soon as he graduated from the University of Tokyo. While working at the university, KARASHIMA was involved in the study of Chinese classical literature, and his interests moved to ethnic issues on the Asian continent. In studying Chinese literature, his concern gradually shifted toward modern literature rather than literature in a colloquial style. Consequently, KARASHIMA started working on the translation of 中国小説史略 earlier than MASUDA did, but KARASHIMA abandoned his translation project because he had to accept the request of MASUDA who asked him to hand over the translation.

This article describes how MASUDA and KARASHIMA, who had been good friends as well as rivals, were associated with ROJIN and why they had to move apart from each other. In addition, their trajectory of life is reviewed based on their own records and by memories of the people who had known them. Finally, the author discusses in a preliminary sketch the path to success of MASUDA's translation of 中国小説史略 with reference to KARASHIMA's work that vanished.